

目には陥らなかつたのだが、今津のことや何かが起つた、めに私はどうしてもそれをする事が出来なかつたのだ。もう一度どうかして昔の磯谷民造になり度いといふ野心の爲めに私は到頭自分を破滅させてしまつたのだ。自分ばかりではない、この家もお前達も總てを犠牲にしてしまはなければならぬ。……私はそれを考へるといつそ自殺をしてしまひ度いくらだ。ひと思ひに生命を断つてしまへば、私はこの今の苦痛から遁れることが出来る。私はお前達がなければ無論自殺をしてゐるに相違ない。あ、ほんとに私はどうしてかう不運なのだらう。人間の運といふものが傾いてゆく道程が私にははつきりと分つて来た。』

さういふ民造の聲は云ひ甲斐もなく打慄へて、蒼ざめたその頬には涙と、もに悲痛な絶望の色が一面に浮んで来る。死を希ふ人の眼の色はそのまま、彼の瞳の底に現はれて、吐く息にも力のない哀切な響きが聞えてゐる。

八重子ははふり落ちる涙を押拭ひながら、

『お父様。どうかもうそんなことは仰有らないて下さいまし。私達はお父様のためならどんな身のうへに落ちましても決して悲しいとは思ひません。それが運命だと勘念めてしまへば何ん

にも悔むことはないと思ひます。唯お父様が自殺をするなんて仰有るのが私達には一番辛いんで御座います。お父様のお體にもしものことが御座いましたら私達はどうなりますでせう。考へても私ぞつと致します。』と、云つて八重子は眞紅になつた眼を上げて恐ろしさうな表情をする。

歌子は唯姉の陰に隠れて、身も世もあられないやうに泣いてゐた。

民造はしばらくすると又口を切つて、

『いや、よく云つて呉れた。私には今お前達がかうして傍にゐてくれることが何よりも嬉しいのだ。もういくら後悔したとて、かうなつてしまつたものは仕様がな。私も出来るだけのことをして善後策を講じてみた上で、もうどうにもならんものならお前達と一緒に潔く運命に服従してしまふより他はない。』さうは云ひながらも民造の顔には一層絶望の色が濃くなつていつた。

そこへ鬼塚がやつと商會への電話を済まして歸つて来た。そして靜かに民造の枕許へ坐ると態と調子を弾ませながら、

「貴方。税關の方はやつとうまくまとまりましたからどうか御安心なすつて。」とは云つたが、彼の顔色はその言葉に裏切つてゐた。何か面白くない結果が起りつ、あるのは誰れの眼にも分つた。

民造は黙つて口を噤んでゐたが、しばらくすると血を吐くやうな沈痛な聲で、唯ひと言「あ、もう駄目だ。」と、呟いた。そしてそのまゝ、唇を噛みながら堅く眼を瞑つてしまつた。

一間のうちには誰れひとり口をきくものもない。深沈と更けた夜氣の底からは庭の瀧水の音がかすかにひびきあがつて来るばかりで、八重子と歌子の歎歎する聲は綿々とその間に断續した。

大厦の倒る、時一木を以て夫を支へることが出来ないやうに、流石に榮耀を盡してゐた磯谷の家も今運命の風に吹き散らされて、果敢ない零落の蒼に落ちていかうとしてゐるのである。無慮一百万の大資産も槿花一朝の幻夢と消えて、やがては来るべき破産の悲しみに泣かうとしてゐるのである。虚榮、それは實に磯谷の家の礎を蝕む悪魔なのであつた。民造の弱い意志と、父としての溺愛はその悪魔を育ぐ、む母胎であつたのであつた。そして美しい八重子はその悪

魔の唯一の寵兒なのであつた。

二十六の一

磯谷の家はそれから四五日の間、云ひやうのない絶望と暗い悲しみに包まれてゐた。家の運命もどうなることやら整理がついてみなければ分らず、と云つて、今日明日にどうなるといふやうな状態でもないので、じりじりと一日一日に最後の破滅に近づいてゆくその道程が耐らなく皆の焦悶しさを煽るのであつた。

民造はその後は大したこともなかつたが、何にしる過勞のために散々に健康を害してゐるので、氣をいらちながらも毎日寝たり起きたりしてゐた。じつと臥床にゐる時でも始終心が騒いでゐると見えて、一寸した物音にもすぐにびくりと耳を欬だてるといふ有様だつた。夜は八重子が歌子かどちらかが父の居間へ寝ることにしてゐるが、眞夜半になつて民造はふいに何かに襲はれるやうに臥床のうへ、弾ね起きたり、不眠のために苦しきうな唸めき聲をたてたりするやうなことが幾度となくあつた。そして一度眼を覺ますともうどうしても寝つかれないかし

て、臥床のなかへ腹匍ひになつて煙草ばかり吸つてゐるやうなことがあつた。彼の愛用してゐる銀製の煙管は、思ひ惱むあまりにつひ強く嚙むので、吸口のところが齒のあとで平つたくなつてしまつてゐた。八重子も歌子もそれをみると胸が迫つて、父の一身が心配になつて耐らなものであつた。

さうした憂い辛い日を送つてゐる間にも絶えず八重子の心頭に去來するのは清岡子爵のことであつた。清岡子爵の幻影は夜となく、晝となく彼女の胸に不幸な空想を醸させて、それから来る苦悶がまた八重子の悩みを倍加させるのであつた。日の光のうすく消えてゆく黄昏などには庭のみえる窓をあけてはるかに西空に瞬く宵の星屑を眺めながら涙の限り泣いて泣いて泣きつくしたりした。歌子はそれをみると姉もきつと家の前途を憂へて泣いてゐるのだらうと思つて、自分もその傍に突伏して姉と一緒に泣くのであつた。

清岡子爵から貞夫の手を通して愈々歸朝の日を報らせて來たのはそれから間もないことであつた。その報らせが八重子の手へ届いた頃にはもう清岡子爵の乗つてゐる英國の大汽船サイベリア號は長崎を出帆して神戸へ向ふ航程についてゐた。八重子は新聞に出てゐる汽船の發着

表をみて、そのサイベリア號が横濱へ入港する時間を確めた。

清岡子爵が横濱へ着く日はやがてやつて來た。その日は朝からどんよりと曇つてゐて、妙に人の心を焦だ、せるやうな陰鬱な蒸しむしするやうな空模様であつた。八重子はどう考へなほしてもこのまゝ、じつとしてゐる氣にはなれないので、何とかして家人の隙を窺つてせめて横濱迄でも迎ひに出たいと思つた。それはもう單に心持ちではなくて、彼女は狂せんばかりの逢ひ度さに一身を賭しても斷行しようとする激しい慾望なのであつた。誰れがなんと云つて引留めようとも、彼女には到底思ひ留ることは出來ないのであつた。

サイベリヤ號が横濱へ入るのは午後の二時頃なので、八重子は午餐を済ますとすぐさま一寸高輪の宮島邸までいつて來るからといつて、いつになく盛裝して出支度をした。あんまり慌ただしくしたせるか、帶をしめるとき金具がこはれて帶留がぶつりと切れたが、それが或凶事の讖をなさうとは神ならぬ身の知る由もなかつたのであつた。

八重子は幸ひ自動車があいてゐるので、それで新橋驛まで送つて貰つて、そこから折柄出かかつてゐた國府津ゆきの列車に乗り込んでしまつた。そしてその一等室の隅へしよんぼり腰を

下ろして、唯胸ばかり躍らせながらそわ／＼してゐた。
列車は八重子の焦躁な心持ちと怪しい運命とをのせて、陰鬱な空の下を横濱の方へ向つて駛つていつた。

二十六の二

横濱へ着くと八重子はすぐその足で棧橋へいつてみた。もう豫定の二時が二十分ばかり過ぎ
てゐるので、彼女はひよつとかしたら清岡子爵がもう上陸してゐるやしまいかと思つて気が氣て
はなかつた。それに棧橋で出迎ひの人達に逢ふのも厭なので、なるべく人目を避けながらこつ
そり棧橋へ出ていつた。

會社の解舟の船頭に聞いてみると、サイベリア號は檢疫の都合でまだ港内へ入つて來ないと
いふ。彼處にゐるのがサイベリアだと云つて指す方をみると、なるほど防波堤のはるか向うに
一艘の四本檣の大汽船が薄い黒煙を空へ吹き靡けながら碇泊してゐる。入港するのは多分夜
に入つてからだらうといふので、八重子はもうどうにも出來ないやうな氣がして、もし翼があ

るならば海を越えてその船の甲板へ飛んでいき度いくらるに思つた。戀しい人はすぐ眼と鼻と
の間になるながら時間が來るまではどうしても逢ふことが出來ないのである。八重子は沖にか
つたその船の白い舷をみると耐らなく涙がさしぐんで來た。

會社の方へ問ひ合はせてみると先を急ぐ出迎ひ人は解舟で本船まで行つても差支へないとい
ふ許しがやつと出たので、八重子は躍り立つやうな嬉しさに嘸られながらやがて解舟を頼んで
それへ乗つた。他にも三四人出迎ひにいく人達が乗つてゐるが、併し清岡子爵とは何の關係も
ない人らしかつた。

解舟はやがて靜まり返つた備い海上へ漕ぎ出した。沖へ出ていくに従つて少しづつ、曲波が舟
を掠めていつたが、それでも八重子は張り切つた心持ちでゐるので、少しも船暈を覺えなかつ
た。

大きな汽船の姿はかはるがはる眼の前に現はれて來た。或ものは巨鯨のやうに黒く、或もの
は明るい鼠色に塗つてあつた。それ等の船の甲板では水夫が忙さうに立働いたり、なかに
は舷へ足場をかけてペンキを塗り直してゐるやうな船もあつた。汽笛やサイレンはひつきり

なしに方々で響いて、港の午後の氣持ちはいかにもものびんと曇り空の下にひろがつてゐた。白い海鷗はそのなかをあやかしのやうにひらく／＼飛んで廻つた。

防波堤の外へ出るとサイベリアの雄姿は刻々に近づいて来た。一萬五千噸級の大汽船はまるで浮城のやうにゆつたりと海上に浮かんでゐる。やがて甲板の上を去來する人の姿もはつきりと見えて来た。

八重子はもしや清岡が甲板へ出てゐるやしまいかと思つて、一心に眼を据ゑてそつちを見上げてゐた。船員服を着た人達の間に立交つて見えるのは歐羅巴人ばかりでいづれも異國の光景に酔つたやうな顔をしながら遠い港の町の方へ眼をやつてゐる。

しばらくすると艇舟はやつとサイベリアの舷梯のところへ横着けになつた。上からは船員が降りて来て、艇舟の船頭達と何事か大聲で語り合つてゐるが、それが濟むと船頭は此方を振り向いて、

「さあ、御順にお上りなすつて下さい。」と、合圖をする。

八重子はやがて小さな銀鎖で編んだオベラバッグを取り上げて立ち上つた。そしてともする

と波のためにゆれる足許を危ふげに踏みしめながらやつと舷梯へ渡つた。

眼眩めくやうな思ひで一段一段舷梯を上つてゆくうちにも、八重子は頬が熱して来て眼の前が茫とするやうな心持ちにならずにはゐられなかつた。もう五分、十分の間にはあの戀しい懐かしい清岡に逢ふことが出来るのである。なんと云ふ鋭い喜びであらう。一度別れてはもう再び逢ふことも出来ないと思ひあきらめてゐた清岡が今、昔ながらの心持ちで此の日本へ歸つて来て呉れたのである！

やつとのこととて甲板へ上るとそこには若い歐羅巴人の船員が立つてゐて、丁寧に禮をしながら英語で話しかける。八重子は少し顔を根めながら流暢な英語で清岡子爵の在否を訊ねた。

船員は幾度か頷きながらやがて八重子を後甲板の方へ連れていつた。

二十六の三

後甲板のとある大きな通氣筒の傍まで来ると、そこには藤椅子を並べて三人の紳士が何やら頻りに語り合つてゐた。そのなかの二人は歐羅巴人で、後向きになつてゐるので初めのうちは

分らなかつたが、もう一人の紳士は漆黒な頭髪の毛をみたゞけても日本人であることが分つた。いづれも流暢な佛蘭西語で頻りに語りつ笑ひつしてゐる。船員はその傍へいつて、突如清岡子爵の名を呼んだ。と、後向きになつてゐた紳士はふいに此方を振り向いたが、それは紛ふかたもない清岡であつた。久しく南洋の風物に親しんでゐたので、顔色も燦々黒み、眼だけが異様な輝きを帯びて、一體にひどく心勞に窶れてみえた。

清岡は八重子の眩しいやうな盛装の姿をみるとさつと顔色を變へながら、

『やあ、……』と、云つて起ち上つた。そして双眼に溢れるやうな歡びの光をたゞへながら暫らくの間はものも云ひ得ないやうに啞然として立つてゐた。

八重子は人の見る眼も厭はずにいきなりその傍へ走り寄つて、

『貴方、しばらくして御座いました。』

と、云つたぎり涙ぐんでしまつた。

清岡子爵はやがて八重子を人氣のない欄干の方へ連れていきながら、

『ほんとにしばらくしてした。よく来て呉れました。』と、口馴れぬやうな日本語で云つて、「どう

して僕が此の船で歸るのが分りました。』と、どもりながら云ふ。

八重子はやつと眞面に子爵の顔を見て、

『あの、私、貞夫様に伺ひましたの。何の船といふことははつきり分らなかつたんで御座いますけど、新聞でみましたら、今日この船が入るやうに書いて御座いましたからきつと乗つて被居るだらうと思ひまして……』

『あ、さうでしたか。そりや態々有難う。』と、云つて、子爵は隠蓑から葉巻入を出して、そのなか、ら葉巻をとりだして火を點けたが、その手はふる／＼細かく打慄へてゐた。

それをみるさへ八重子は胸のどよめきを抑へることが出来なかつた。なんだか夢のやうな氣がして、じいつと立つてゐると失神してゆくやうな心持がした。彼女はそれを紛らかさうとして、何か話しかけようと思つたが、妙に嬉しさばかりが込み上げ、舌が結ばれて言葉が唇へ出て來ない。やつと氣を取り直して、彼女は少し清岡の方へ寄り添ひながら、

『あの、リーナさんはどう遊ばしましたの？ 御一緒なんて御座いませう。』と、一生懸命になつて聞いてみた。

と、清岡は何とも云へない傷ましい顔つきになつて、
 『え、一緒に連れて来ました。』と、云ふには云つたが、やがて顔を背けて、『今日は少し落着いてゐるやうですけど、どうもあれにもほと／＼困つてゐるのです。もう到底恢復の見込みもないやうですし、……。』

『それぢやなんて御座いますか、もうほんとに、……。』發狂と云ひかけて八重子は急にその忌はしい言葉を呑んでしまひながら、じつと清岡の顔をみた。

清岡はその眼を見返して、

『もうあのリーナは立派な精神病者になつてしまつたのです。考へてみれば可哀想でもありませんが、人種が違つてゐるもの同志では何かにつけて理解がないもんですから……。』と、云つて葉巻の烟を海の方へ吐き出しながら、『實は上陸したら早速この横濱で獨逸人の經營してゐる病院がありますからそこへ入院させてしまはうと思つてゐるのです。彼地の醫者の手へかけたら少しは快くなるかと思ひますから。』

八重子は涙ぐんだ眼で寝れ疲れたやうなその子爵の顔をそつと見つめてゐた。

二十六の四

甲板にさうしてゐては人眼があるので、清岡子爵はやがて八重子に向つて、

『八重子さん。入港までにはまだ三時間も四時間も間があるんださうだから兎に角一度船室へ来ませんか。いろいろお話し、たいこともあるし、伺ひ度いこともあるから。……』と、云ふ。

八重子は態とらしく時計を出してみて、

『まだ三時半で御座いますのねえ。私晩までは用が御座いませぬから、もう暫らくお邪魔を致しますわ。』と、云つて、そのまゝ先へ立つて歩いてゆく子爵の後へついていつた。

後甲板の正面のところから入る廣い階段を降りるとその下は大きなサロンになつてゐる。子爵は自分の船室へいかうとして、ふと又氣が變つたやうに、そのサロンの扉を細めに開けてみて、

『あ、此處が開いて居る。』と、云つて、そのまゝつか／＼となかへ入つていつた。
 なかには善美をつくした椅子や安樂椅子や小卓が眞紅な絨氈のうへ、置き並べてあつて、そ

のうへには明るい花電燈が煌々と輝き渡つてゐた。彼方此方の小卓には三組ばかりの客が坐つてゐて、紅茶などを飲みながら頻りに快談してゐた。

子爵は隅の方の小卓へ行つて、その椅子を八重子にすゝめながら自分も對向ひに腰を下ろした。そしてボーイを呼んで紅茶を命じて、何か菓子でも持つて来るやうに云ひつけた。

子爵はそのまゝ、煙草を取り出して火を點けながら、

「併しほんとによく来て呉れました。實は私も逢へないだらうと思つて心配しとつたのです。或人の話では貴女がもう宮島さんと結婚してしまつたやうに聞いとつたもんですから……」と云ふ。

八重子はそれを聞くと急に暗い顔になつて、

「それは大變な間違ひで御座いますわ。私そんな結婚どころの騒ぎぢや御座いませぬの。實はもう貴方も御承知かも知れませんが、今度父が非常な失敗を致しまして、もう破産をしなければならぬやうな羽目になつて居りますもんですから……」

「え、破産？」子爵は思はず聞答めて、「そんなことはないでせう。磯谷商會が破産する、そ

んな馬鹿なことがある筈がないぢやありませんか。」

「い、え、ところがさうぢや御座いませぬの。米國の方で鐵の買占めをやつたりなにかしましたもんですから、そのためにすつかり可けなくしてしまひまして……私、宮島さんへ參るのも唯今のところではどうなるか分らないんで御座いますわ。」その語調は漸次と自棄になつてくる。

子爵は感慨深い顔をしてじつとひとつところを眺めてゐたが、やがて、

「さうでしたか、そんな大きな變化があつたのですか。」と、呟いて、今度は自分の身のうへを省みるやうに口を噤んでしまつた。そして少時すると急に絶望的な眼色になりながら、「なににしても、私と貴女の運命は決して幸福ぢやなかつたんですな。私はそれを考へるとなんだかかうして貴女に逢つてゐるのさへ恐ろしいやうな氣がしてならんのです。これから先は私の生涯は益々暗い方へばかり落ちていくでせうし、たとへそれが今から分つてゐてももう私にはどうすることも出来ない。私は自分の意志が弱かつた、めにこんな不幸な身のうへになつてしまつたんです。自分ばかりではない、貴女の將來までも不幸にしてしまつたんです。あの時私はど

うしてすべての壓迫に耐へしのがぶことが出来なかつたらう。それが今では到底拭ひ消すことの出來ない悔恨になつてゐるのです。』さう云ひながら子爵はじいつと八重子の眼のところを見つめた。

八重子は黙つて涙を抑へて聞いてゐた。

二十六の五

八重子はやがて蒼ざめた頬に幾條となく涙を流しながら、

『清岡様、どうかそれは仰有らないで下さいまし。不幸といふ點から申しますと、貴方よりも私の方がどんなに不幸で御座いませう。私の考へ違ひから第一の結婚には失敗してしまひます、貴方とはお別れ致さなければならなくなつてしまひますし、その上今度のやうに家が破産してしまはなければならぬとしたら私の將來はどうなるので御座いませう。それを思ふと私自分の考へがすつかり變つていくやうにはかり思へてならないんで御座いますわ。』

清岡は沈痛な顔色になつて、『變つていくといふと、どうなるのですか。』

『いえ、それははつきりどうなるかは自分でも分りませんのですけど、私もうどうなつても構はないやうな心持が致します。今迄は私として到底出來ないことが幾つも御座いました。父の子として、してはならないことや、又人の妻として、してはならないやうなことが幾つも私の周圍に御座いました。併しそれももう私には何んでもなくなつたので御座います。感情の動くがまゝに動くといふことはい、ことぢや御座いますまい。併し私にはもうそのほかにどうにもしやうがないんで御座いますの。』さういふ言葉の底にはもう打消ことの出來ぬ自暴自棄が響いてゐた。

子爵の顔色はそれと一緒に妙に陰鬱な輝きをもつて來た。眼の底には強い決心が動いて唯それを口へだして云ふ言葉を見出すのに苦しんでゐるやうであつた。

その時、サロンの扉の影では軽い靴音が聞えて、やがてその扉はすうつと細目に開いた。と、見ると、その隙間からは大きな眼と、金髪が見えて、誰れか室のなかをじろく覗き込んでゐる氣勢がする。子爵はそれを見ると吃驚して、突如立上つたが、それと一緒にその人影はちらりと白衣の裾をみせたつきり又扉の影へ隠れていつてしまふ。

子爵はつか／＼とそつちへ出ていつて、

『リーナ、リーナ。』と、呼んでみた。併し返事がない。

子爵はそのまゝ、卓子へ歸つて来て、何とも云はずに腰を下ろしてしまふ。

八重子はリーナと聞くと何かしら顔色をかへて、

『ねえ、貴方。今のがリーナさんで御座いますの。あゝして船室から外へ出てお歩きになつてよろしいんで御座いますか？』と、心配さうに云ふ。

子爵は軽く合點いて、

『唯の憂鬱狂ですから、格別警戒しなければならん必要もないのです。』と、言葉少く云ふ。そして又新たな葉巻に火をつけながら、『併しほんとに八重子さん。これから先二人はどうなつていくんでせうなあ。リーナがあんな病氣になつたのも實を云ふと私のためなんです。私が新嘉坡にゐた間私の心は常に動搖してゐました。なつかしい日本のことを思つたり、貴女のことを思つたりすると私は自分までが氣狂ひになりさうでした。リーナは貴女のこととも知つてゐます。そりや私がリーナにそのことを打明けて話したからなんです。リーナは常に私を疑つてゐました。』

私はリーナに對しては大きな罪惡を犯してゐたのです。併し私の心はあの女の忠實な心に酬いるにしては餘りに荒みすぎてゐたんです。子爵の言葉はいつしか激越な悲調を帯びて、悔恨の念が鼻と胸に迫るやうにやがてその頬には潜々と涙が流れ落ちて來た。

八重子はなにかなしに胸を割かれるやうな心持になつた。忘れ得ぬ心の古創のために海外萬里の空に彷徨して、仍ほ且つ我れと我が身の妄執に惱んでゐた子爵、忠實なリーナといふものが傍にゐながら遂にその熱い情に報いることの出来なかつた子爵、その悲しみに充ちた心のうちを思ふと八重子はもう清岡のためならこの生命などは擲つても惜しくはないやうな突き詰めた心持にならずにはゐられないのであつた。

二十六の六

そんな話を聞いてゐるうちに八重子はもう耐らなくなつて、卓子のうへへ置かれた子爵の手をうへからじつと握り緊めた。そして四邊を見廻すと今迄そこらの卓子に坐つてゐた他の船客達はもう皆自分の船室の方へ歸つていつたものと見え、一人減り二人減りその頃には誰れも

なくなつてゐたので、八重子はそのまま、くづをれるやうに子爵の肩へ寄りかゝりながら、
 『ねえ、貴方。かうなりましたうへはもう私達の歩く道はたつたひとつしきや御座いませんわ
 ねえ。』と、涙ながらに泣く。

子爵はそつと八重子の體を抱きながら、

『いや、八重子さん。そんなことは今茲で口に出して云ふべき事ぢやないでせう。かうなつた
 うへは唯なるがまゝになつてゆくより他にしやうがないのです。今更これが自分達の歩く道だ
 と口で云つたときに、それは到底自由になるものぢやない。運命はすべてのものをさらつてい
 つてしまひます。大きな河の流れが石でも何んでも流していつてしまふやうに、私達から希望
 も願望もすべてのものを流し去つてしまふのです。』

八重子は又激しく歎き泣きをしながら、

『全くて御座いますわねえ。今迄がさうでした。又これからもきつとさうなるので御座いませ
 う。それを思ふと私どうしても貴方のお傍を離れるのが厭なんです。一旦かうしてお眼に懸り
 ました以上はもう私決して貴方のお傍を離れません。貴方の爲には家も捨てませう。これが

ら先の生涯も捨てませう。もしお望みならば私死んだつてい、と思ひますわ。貴方のために
 死ぬ、そりや私にとつて却つて嬉しいことなんて御座いますわ。』さういふ言葉は溢れてくる
 情緒にふるへて、八重子の唇はわななくと拘攣して來た。

子爵は黙つて千斷れるほど強く強く八重子の肩を抱きしめてゐた。

そこへ又先刻の扉のところてかすかな、忍ぶやうな人の足音が聞えて來た。子爵はそれが氣
 になるので、そつと八重子の體を押し離しながら扉口の方を振り返つたが、その時、細めに開いた
 扉口からは人影は見えずに唯眞白なスカートだけがはみ出たやうになつて見えてゐる。そして
 その次の瞬間に白い腕がちらりとみえたかと思ふと、突如ばあんといふ恐ろしい爆音が耳を劈
 くやうに聞えた。

子爵は悸平として宙腰になつたが、とみると八重子はそれと同時に、

『うッ』と異様な呻めき聲を立てながら椅子と一緒にぱつたりと床の上へ倒れてしまつた。子
 爵はその時初めて誰れか、短銃を發射したのを知つたのであつた。

子爵はそのまま、八重子のうへを飛び越えて扉の方へ出ていつたが、扉は向うからさつと開い

て、そこから眞白な服を着たりーナが片手に短銃を持つたまま、雙手を高くか、けて跳り出して来た。そしていきなり子爵の胸へ抱きつきながら、しどろもどろな英語で、

『私は復讐をしたんです。復讐！ どうか私を殺して下さい。』と、絶叫する。

もうその頃には方々から時ならぬ銃聲に驚かされて船員や船客達がぞろ／＼とサロンへ駆け集まつて来た。彼方からも此方からも『どうした？』『どうした？』といふ聲が聞える。

子爵は狂ひ廻るリーナを突き退けて床のうへに倒れた八重子の傍へ駆け寄つていつた。八重子は片手で無意識に顔を押へて倒れてるたが、とみると弾丸は峠谷から前額へ貫通してて、鮮血は美しい顔の反面をみるも傷ましい姿に彩どつてゐた。無論、彼女はその一撃によつて敢なく落命してゐたのであつた。

子爵は狂氣のやうに八重子の耳へ口を當て、彼女の名を呼んだが、一度閉ぢた唇はもう再び開かれる期もなかつた。餘りの驚きと悲しさに子爵もそのまゝ、呆然としてしばらくは口もきけないのであつた。

船の事務長や船醫が駆けつけて来た頃にはもう八重子の體は冷きつて、美しい着物を着たま

ま安樂椅子へ横へられたその姿は何とも云へない運命のいたはしさを語つてゐるのであつた。

二十六の七

思ひ懸けもない悲惨な事件はやがて一船の大騒擾を巻き起した。それを聞き傳へた船客達は我れ勝ちにサロンの前の廊下へ殺到して来る。そこいらは見るみるうちに身動きも出来ないやうな混雜を呈して来た。殊に日本の貴婦人が殺害されたと云ふことが外國人の好奇心を挑發したのであつた。なかにはその混雜をみて卒倒した婦人客などもあつた。

サロンでは船醫や事務長が入港間際の忙しい職務を捨て、頻りに八重子の死體を處理して居た。この儘にして置く譯にもいかなないので、至急電話で磯谷家へ報告すると同時に八重子は病者の取扱ひてひとまづ下船し、ランチで横濱の海岸病院へ送られ、そこで東京から来る引取人を待つことになつた。そしてリーナの方はそのまゝ、船員の手で船室へ堅く拘禁されてしまつたのであつた。

八重子の死體はやがて船醫の手で汚れた血潮を悉く拭ひ去られ、頭部の創傷は雪白な繻帯で

掩ひ隠され、すべての準備がと、のふと美しい盛装のま、船の擔架に載せられて甲板へ運び上げられた。船客は方々の物陰へ集まつて、ひそ／＼と何ごとか呟きながら頻りにその有様を眺めてゐた。

甲板のうへにはもう物悲しい夕闇が来て佇んでゐた。白い電燈は烟突の影やボートの影に冷たくしみついて、何とない陰鬱な光を投げてゐる。そのなかを八重子の死體は防水布の掩ひをかけた擔架に運ばれてしづ／＼と聲もなくランチの方へ昇ぎ降ろされていつた。

清岡子爵はそのあとからまるで喪心したやうな蒼ざめた顔をしながら隨いていつた。餘りに思ひ懸けない出来事なので、彼にはまだ十分にその事象の眞實がつかめないのであつた。考へてみれば何とも云ひやうのない不思議な出来事である。あのリーナが短銃を以て突如八重子を射殺した。そんなことがどうして信じられよう、殊にあのリーナがどうして短銃などを持つてゐたのであらう。ひよつとしたら自分の荷物の底深く秘めて置いたあの英國製の自動短銃をいつの間にかこつそり盗み出してゐたのではなからうか。そんな取留めもない考へは絲を繰るやうに先々とつゞいた。

八重子の死體がランチのなかへ昇き据ゑられると清岡子爵も舷梯を降りてその艦の方へ乗つた。舷梯の下のところでは船長がそれとなく弔意を表するやうにじつと立つて敬禮してゐた。ランチはやがて眞暗な波を蹴つて駛りだした。船首をぐるりと向けかへたかと思ふと、そのま、港内の埠頭の方へ向つて眞一文字に航走していつた。

清岡子爵は黙つて八重子の死體の昇き据ゑてある船室のなかへ降りていつた。そこにはほの暗い夕闇が舷窓から射し込んで来て、防水布の掩ひの間からは八重子の着物の裾模様だけが花のやうに浮き上つてみえてゐる。あの華美好きな、燃えるやうな熱情をもつた八重子ももう永遠に此世の日の光に浴することは出来ないのである。虚榮の夢にあこがれそのためにすべての純眞な生命の源を枯らしてしまつた八重子は今運命の黙せる秘密に包まれて冷たい屍となつて横たはつてゐるのである。幾十百人の男を惱殺したその美貌も、その唇も今はもはや穢土に歸るよりほかに行くべき處もないのである。憐れなこの末路、しかも思ひもよらぬ悲惨なその横死は人々の胸にどんな思ひを湧かせることであらうか。罪と罰、もし神のしろしめす此の世にさうした因果の關係が實在するとすれば八重子は當然その試煉の案に投ぜられたものと

云はなければなるまい。リーナの放つた短銃の弾丸は決して狂者の意志のみを以て律すること
は出来ないであらう。

横濱埠頭の白熱燈の輝きはやがて子爵の眼の前に謎の如くに搖曳して来た。子爵は暗澹たる
自分の運命を思つて心のなかに人知れず激しく啼泣しながらその光をじつと凝視してゐた。

それから五年の歲月は流水のごとく激みもなく過ぎ去つていつた。

八重子が不慮の横死を遂げてから後の磯谷家は遂に打續く不幸のために持ち耐へられなくな
つて、さながら大厦の倒壊するが如くに百萬の富を擁したその誇りも敢なく泥土に委してしま
はなければならなくなつてしまつた。商會が先づ破産すると今度はその火の手が磯谷家へ廻つ
て永田町の邸宅は競賣に附せられてしまふ、すべて冷たい運命の手の裁くがまゝに任せて、民
造はやつと取止めた僅かな養老金とそれから方々の事業の間に残された權利に對する配當とを
集めて、それでも二三萬の資産だけは辛うじて取残すことが出来たので、彼はそれを堅く守つ

て、大磯の別荘で寂しい隠遁的な生活に果敢ない老後を養ふことになつたのであつた。

その間に磯谷家の周圍を圍繞してゐたいろ／＼な人々や家族はどうなつたであらうか。

今津家は東海汽船の隆盛と、もに益々發展して、今では過去の磯谷家にまさる巨萬の富を積
んでゐる。伊佐雄は二年の間歐米を漫遊して来て、今度は貴族中でも名門と唄はれてゐる桐野
伯爵家の令嬢を迎へて第二の夫人とし、小石川の邸宅を増築して幸福なその日を送つてゐる。

稻垣の貞夫は父の死後病院を繼いで八重子が生前にも噂のあつた村木の娘を妻とし、これも
幸福な生涯に入つたのであつた。

茲で讀者に最も興味を興へるのは清岡子爵と、歌子のその後であらう。常に八重子の周圍に
まつはつてゐた宮島伯や山中やその他の人々はさして變化のない五年を過ぎしてゐるので、そ
れ等の人々に就いてはしばらく筆を收めて、先づ前記の二人の運命から語らねばなるまい。

清岡子爵は八重子の死後全く社會の視聽から消えてしまつたやうな生涯に入つたのであつ
た。リーナはそのまゝ、發狂者として、本國の母の許へ送り還されてしまつたので、子爵はたつ
たひとりで大森の邸宅で暗い思ひのうちに日を暮してゐたが、丁度去年の春になつて何を思ひ

ついてか、邸宅も何も人手に渡して、飄然と印度へ去つてしまつたのであつた。それから香として消息も聞えず、彼は全く今日までその生死さへ知れないのであつた。或人の噂ではなんでも印度の内地に住む英國の畫家の許に寄食してゐるとかいふことであつたが、それさへ確かな事實ではないのであつた。

歌子の方は父が大磯へ隠遁するまで常にその傍にあつて寢食の勞を執つてゐたが、父の生活が固定してしまふと間もなく、豫ねてからの希望通りに北海道の武田欽哉と結婚の式をあげたのであつた。そして今では石狩の原野の真中にあるその農場で幸福に充ちた生活を営んでゐるのである。もし純眞な幸福といふものが必ずしも奢侈や権力や豪華な生活のなかばかりにはないとすれば彼女のごときは此の世で一番清らかな幸福を享受してゐるものと云はなければならぬまい。

相愛の夫婦の間には既に二人の子が生れてゐた。農場の東にある小さな丘陵のうへには二人の結婚を記念するために態々札幌の道廳の技師に頼んで設計して貰つた理想的な住宅が建てられてゐる。落葉松の防雪林、牧草の庭、家畜小舎、さう云つたものはいかにも北海道らしい特

色をもつてゐて、寂しいなかに何處か清新な活力の漲つてゐる様を現はしてゐた。

八重子が嘗て浸つてゐたやうな生活はこの新しい武田の家ではその片影さへ見られなかつた。夫婦の生活はそれほど理想的なものであつた。鞏實な、かに溢れるやうな愛情が纏綿してゐて、何とも云へない和樂の氣が飄々としてゐた。

民造にとつては孫に當る二人の兒は日に日に健康さうに育つていつた。

八重子が世を去つてから六年目の春この農場の武田の家では初めて東京から民造の來道を迎へた。民造は何とも云へない歡びに包まれながら到頭それから四箇月ばかりの間農場に滞在してゐたのであつた。

石狩の平原に漲る春光は到底内地では見られないやうな美しい光景であつた。落葉松の梢にはまるで嘘のやうな緑の新芽が青々と萌えたつて、野には明るい光のなかに小禽の聲がすがすがしく響き渡つてゐる。毎日々々西風が暖かく吹き渡つて、梅や櫻が一時に咲き盛つて來る。殊に農場では林檎の花が美しかつた。

或夕暮、武田夫婦は二人の愛兒と民造とを伴つて、農場の馬車で遠い農場の端れにある燕麥

の耕地の方へいつてみた。丁度盆のやうな夕陽は今札幌岳の彼方に沈んで、暮靄のために野は蒼茫とした夕闇に包まれようとしてゐる。ところ／＼に散點した村里の灯影はまるでその生活の平和さを示してゐるやうに長閑に明滅してゐる。

民造は歌子に助けられながら馬車を降りて、毛氈のやうに道を掩つた牧草の上へ立つた。二人の兒達は嬉々とそのまはりにまつはりついて、『お祖父さま。お祖父さま。』と廻らぬ口で騒ぎまはつてゐる。

民造はやがて農場の柵に倚つてじいつと落日の残映を眺めてゐたが、何と思つたか疲れ惱んだやうなその老の眼に涙を一杯たゝへて、嘆息をつくやうに、

『實に、景色ぢやなあ。私は今迄の生涯にこんな静かな景色を一度も見ることがない。そればかりか、私はこんな幸福な思ひをしたことは生れて初めてぢや。』と、云つた。

歌子も涙ぐみながら、

『お父様。嬉しう御座います。こんな田舎の生活を幸福だと思召して下さるのが私に取つては何よりなんて御座いますわ。私はどうかして此心持ちをお父様に知つて頂き度いと思つて、今

迄どんなに力をつくしましたらう。』と、云ふ。

民造は幾度か涙を呑んで、

『事業、金、権力。あゝみんな夢だつたのだ。もう時は過ぎ去つてしまつた。私の悪夢ももうすつかり覺めてしまつたのだ。私は今日といふ今日は初めてあの夕陽の光をはつきりと自分の心で眺めることが出来た。私は心の底から今迄の生涯を断念することが出来たのだ。』

欽哉はそれを聞くと感慨に充ちたやうな聲で、

『お父様。世の中には随分虚偽な生活が多いのです。併しこゝではすべての生活が眞實をもつてゐます。それは生活の對照が土そのものだからなのです。自然は決して嘘を吐きません。春になればこの通り青々とした草樹の若芽がめぐみます。この美しい景色は決して嘘ではありません。この自然を生活の對照としてゐる人間には嘘を吐く必要もなければ、自分をよりよく見せようとする必要もないのです。裸で働いてゐるさへすれば幸福は自然に自分の身の周圍に集まつて来る。そこに何とも云へない人生の妙趣があるのでありますまいか。』

民造はさも感じ入つたやうに合點きながら漸次と薄れてゆく落日の反映を飽かず眺めてゐる

た。四邊には夜の闇が次第に濃くなつて、ふと見ると東の空には大きな楡の樹の梢に洗ひ出されたやうな月がほんのりと輝いてゐる。

二人の孫達はそれをみると涼しい聲をあげて、

「お月様えらいな、お日様の兄弟で、……と、歌ひだした。その聲にも幸福が溢れてゐた。

民造は耐らなくなつたやうに二人の孫の頭へ手を置きながら、

「歌子。今あの八重子が生きとつたらなあ、……と、先は云ひ得ないやうに涙に咽んでしまふ。欽哉も歌子も唯黯然として廣漠無邊の虚空を眺めてゐた。そこにはさながら運命の謎のやうにたつたひとつ宵の明星がきらり／＼と空の沈黙を壓して輝いてゐた。

幹彦全集第四卷終

大正十二年一月廿五日印刷
大正十二年一月廿八日發行

定價金貳圓五拾錢

幹彦全集第四卷

章之權作著



發行所

東京市日本橋區
通四丁目五番地

春陽堂

電話東京一六一七番
本局四二一〇番

著作者

長田幹彦

發行者

和田利彦

印刷者

中野鉄太郎

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

■ ヴェストポケット傑作叢書

■ 各册金五拾錢
■ 郵送料各四錢

Vest-pocket Series
of
Masterpieces,

(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	本叢書は當代の名作家の傑作を選び集 る者なれば、諸君は本の手選に煩 たるなく、體裁は感ぜよ、讀書の型なれ ば、特別に機の上、擴げ、讀書のホケ ツト、携へて、或は仕事に、暇に、ホケ にも、上、諸君は、或は、手藝に、玩し、得 る。總括的に、當代の最高の藝術を、此 べし。即ち、現代の文化生活の中心に して、常に新しき藝術に、觸れんと欲す 者は、常に新しき藝術に、觸れんと欲す					
■ 若杉裁判長 菊池 寛著	■ 若き日の話 豊島與志雄著	■ 生と死との記録 豊島與志雄著	■ 地獄變 芥川龍之介著	■ 戲作三昧 芥川龍之介著	■ 忠直卿行狀記 菊池 寛著	■ 恩讐の彼方に 菊池 寛著						
(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)		(12)	(11)	(10)	(9)	(8)
■ 海神丸 野上瀾生子著	■ お國と五平 谷崎潤一郎著	■ 彼と小娘里見 彈著	■ 勝負 負里見 彈著	■ 受験生の手記 久米正雄著	■ 金色の死 谷崎潤一郎著	■ 棋 麟 谷崎潤一郎著		■ 心中後日譚 久米正雄著	■ 良友 惡友 久米正雄著	■ 芋 粥 芥川龍之介著	■ 或日の大石内藏之助 芥川龍之介著	■ 蘭學事 始 菊池 寛著

以下續々刊行

紅葉全集

尾崎紅葉氏著

合判七五〇頁位 美本
各貳圓五十錢 送料拾八錢

本集は明治文壇第一の巨匠として我が國文學史上に不朽の名を刻まれたる尾崎紅葉氏の全作品を収録せるものである。氏が、江戸藝術の精粹を捉して、渾然たる新文藝を建設し、我が文運に新生命を與へたその功績は、紅葉氏の所謂「七度生れて文章のため、に盡さん」と云ふ包懐ありて始めて得べきものであつた。

- 第一卷 多情多恨、夏瘦、關東五郎、むき玉子、新色ざんげ、手引の米、命の安賣。 ◇ 第五版
- 第二卷 三人妻、女の顔、花ぐもり、浮木丸、西洋娘氣質、煙霞療養、偽金、わかれ蚊帳。 ◇ 第五版
- 第三卷 伽羅枕、男心、此ぬし、戀の病、文ながし、千箱の玉章、草紅葉、八重櫛。 ◇ 第三版
- 第四卷 寒牡丹、おぼる舟、安知歌不林、不言不語、紅白毒饅頭、油柄杓、新油柄。 ◇ 第三版
- 第五卷 隣の女、青葡萄、夏小袖、心の闇、冷熱、紫、東西短慮刃、茶碗割。 ◇ 第三版
- 第六卷 金色夜叉、銀、鷹料理、三箇條、猿枕、湯の花。 ◇ 第三版

鏡花集

泉鏡花氏著

袖珍本七百餘頁
各定價金貳圓
各送料拾五錢

鏡花氏の藝術の偉大さは本質的なもので、即ち作者の経験する感情——憧憬と反抗に根ざす——を讀者に移入し、作者の形造る感情の世界に全々引入れてしまふ驚くべき魅力にある。勿論氏の作品に特有の構造、形式、色彩音色の調整が此使命を果すために與つて力あることは疑ひもないが、氏の作品が他に類例も見ない程讀者の心に影響する力を持つて居るのは主として氏の持つてゐる至純の感情のためである。

第一卷 豫備兵、義血俠血、三尺角、同拾遺、辰巳巷談、凱旋祭、れむり看守、湖のほとり、水鶏の里、葛飾砂子、袖屏風、うしろ髪、湯女の魂、二世 * 第十二版

第二卷 高野聖、誓の巻、若紫、胡蝶曲、瓔珞品、清心庵、註文帳、紅雪録。 * 第十版

第三卷 女仙前記、きのく川、縁結び、沼夫人、海異記、雌蝶、七本櫻、春晝、 * 第八版

第四卷 取舵、綿帯記、黒百合、照葉狂言、揚柳歌、吉原新話。 * 第八版

第五卷 月下園、三枚續、さゝ蟹、鐘聲夜半録、波かしら、親子そば三人客、柳小島、風流蝶花形、草迷宮、笈摺草紙、舞題目、千鳥川、鶴の姿、藥草取。 * 第五版

小栗風葉氏作

青春

合判美本 第十三版

金貳圓五拾錢送料拾八錢

本作一度世に出づるや忽如として人氣を惹きつけ、新時代人の好個の題目を提供し、やまの多情人なる青年欣哉と情に脆き繁子の名は彼等が犯せる罪と共きものなり。青春の血の高鳴りを記念すべきものなり。時代の英雄か時代の犠牲者か、若しくは永遠の罪人か、これ等すべし。疑問は、時代の赴く處を知る者のみ獨り答へ得る者なり。

高山樗牛氏作

瀧口入道

小村雪岱氏裝畫
定價金八拾五錢
書留送料金拾壹錢

第百版

戀に望みを失ひて世を捨てし身の世に捨てられず、名家の運命を影に負ひて、二十六年を浮沈の波に漂はせし齋藤瀧口時頼が多恨なる生涯を描き、平家一門の世に類ひなき末路を偲ばしむ。天才高山樗牛博士が若き悲しみの全幅を披瀝した光輝ある出世作。

多情多恨

尾崎紅葉氏作

紅葉氏の傑作は、金色夜叉にあらすして本篇なり。情緒纏綿たる筆致よく人情の奥底をうかがふ。

壹圓八拾錢
送料拾五錢

金色夜叉

尾崎紅葉氏作

▼貳圓參拾錢
送料拾八錢

續金色夜叉

長田幹彦氏作

▼定價金貳圓
送料拾五錢

金色夜叉終篇

上卷 下卷

長田幹彦氏作

▼各壹圓七拾錢
各送料拾五錢

熱海の海岸、鹽原温泉等を背景にして描き出された貫一お宮の悲劇は明治文壇の巨匠尾崎紅葉氏が最後の七年を挺し死迫るも尚筆を擱かなかつた千古の名作である。宜なる哉その發賣部數は明治大正の出版界を通じて第一位を占め、社會の全般に異常なる感激を呼び起した。その感激の募れば募る丈け、この名作の中絶されたるを讀者は嘆き惜んだ。そこで大正の紅葉をもつて目せらる、長田幹彦氏は私淑せる先人の偉業を繼承し、多年苦心經營、遂に前後三卷に互る續篇を完成した。その後の貫一お宮は如何、荒尾讓介赤檉滿枝は如何。

高野斑山氏校訂
黒木勘藏氏

三六判布表裝天金本

近松門左衛門全集 全十卷

各卷 金貳圓五拾錢 送料拾貳錢

輯集の豊富……淨瑠璃と歌舞伎狂言と合せて百四十篇、其三十篇は未
翻刻の珍書。

歌舞伎狂言本十六篇……近松の作の一面を示す貴重品。本全集の誇。
底本は古刻……一切古正本に據り、異本を参照して、從前の翻刻書に
基かず。

此の全集の
校正の嚴密……假名遣の訂正、佛語漢語に對する用字の正格（但訛語

七大特色

方言は元の儘、句切及び曲節附の保存。
挿繪の珍貴……繪入細字本及び狂言本から採つて、毎卷挿入十數葉。
場面想察の好資料。
作品の排列……内容と傍證とによつて、新に立てた時代順。最も苦心の存する處。
研究の手引……劇の歴史、作者の傳記、著作の解説。(序卷)

序卷

義太夫劇の日本劇史上に於ける地位、近松門左衛門の傳、著作年表、著作の解説並に梗概。

第一卷

元祿四年迄

花山院后評、赤染衛門榮花物語、つれづれ草、世繼會我、伊呂波物語、門出八島、凱陣八島、源氏烏帽子折、百夜小町(狂言本)、夕霧七年忌(狂言本)、出世景清、三世相、佐々木先陣、會我七以呂波、天智天皇、十二段、水木辰之助錢振舞(狂言本)、大覺大僧正御傳記、東山殿子日遊、戀塚物語。

第二卷

元祿十一年迄

念佛往生記、本朝用文章、日本西王母、摩耶山開帳(狂言本)、今川了俊、松風村雨東帶鑑、釋迦如來誕生會、鎌田兵衛名所盃、傾城阿波鳴門(狂言本)、頼朝伊豆日記根元會我、團扇會我、當流小栗判官、一心二河白道(狂言本)。

第三卷

元祿十五年迄

一心五戒魂、傾城佛の原(狂言本)、阿彌陀池新寺町(狂言本)、浦島年代記、姫藏大黒柱(狂言本)、傾城富士見里(狂言本)、下關猫魔館、蟬丸、天鼓、會我五人兄弟、大磯虎稚物語、賀古教信七墓廻、傾城壬生大念佛(狂言本)、薩摩守忠度、主馬判官盛久。

第四卷

寶永三年迄

傾城三の車(狂言本)、最明寺殿百人上臈、會根崎心中、唐崎八景屏風(狂言本)、薩摩歌、吉祥天女安産玉(狂言本)、雪女五枚羽子板、用明天皇職人鑑、源義經將茶經本領會我、加增會我、心中二枚繪草紙、兼好法師物見車、碁盤大平記、卯月紅葉、會我扇八景。

第五卷

寶永七年迄

吉野忠信、堀川波鼓、卯月の潤色、酒吞童子枕言葉、心中重井筒、傾城反魂香、心

中萬年草、待夜小室節、淀鯉出世瀧德、五十年忌歌念佛、御曹司初寅詣(狂言本)、
柘狩劍本地、會我虎が磨、今宮の心中、百合若大臣野守鏡。

第六卷

正德三年迄

心中又は氷の朔日、孕常盤、夕霧阿波鳴門、源氏冷泉節、吉野郡女楠、大職冠、傾
城懸物揃、弘徽殿鶉羽產家、嬬山姥、長町女腹切、傾城吉岡染、天神記、繁靜胎内
裙、冥途飛脚、

第七卷

享保三年迄

相摸入道千匹犬、娥歌加留多、嵯峨天皇甘露雨、大經師昔曆、持統天皇歌軍法、生
玉心中、國性爺合戰、國性爺後日合戰、槍の權三重帷子、聖德太子繪傳記、山崎與
次兵衛壽の門松、日本振袖始、會我會稽山、傾城酒吞童子、日本振袖始(狂言本)。

第八卷

享保九年迄

博多小女郎波枕、善光寺御堂供養、本朝三國志、平家女護島、傾城島原蛙合戰、井
筒業平河内通、雙生隅田川、日本武尊吾妻鏡、心中天網島、津國女夫池、女殺油地
獄、信州川中島合戰、唐船嘶令國性爺、心中宵庚申、關八州繫馬。

第九卷

補遺の卷

悉皆未翻刻書

500
51

終